

## (関西・中部地区) 第46回歌舞伎観劇

## 関西・歌舞伎を愛する会 結成40周年記念

7月12日難波、大阪松竹座で七月大歌舞伎を鑑賞しました。参加者は5家族9人。今回「関西・歌舞伎を愛する会」結成40周年記念という公演でした。11時開演予定で10時30分頃の開場前から大阪松竹座前に多数の観客が行列をなして、人気の高さを感じました。ただ、ここに至るまでの苦労は大変なものだったらしく、この興行名の意味は40年前に遡ります。

大阪での歌舞伎興行は大変厳しく、当時の公演の広報には歌舞伎という文言を入れると入りが悪く、歌舞伎の文言を外さないといけないほど歌舞伎が低迷していたそうです。そこで、澤村藤十郎さんが先頭に立って片岡仁左衛門さんや関係者協力を得て、「関西で歌舞伎を育てる会」が結成され地道に活動を続けられました。平成4年に「関西歌舞伎を愛する会」に名称変更した頃になってやっと、その成果が実って連日「満員御礼」の立看板が出ずっぱりとなるほどに、大阪での歌舞伎ブームが定着したそうです。

今日の演目について

## 「色気嘶お伊勢帰り」

関西の演目らしく、松竹新喜劇の代表的な作品を初めて歌舞伎狂言として上演されたもので、伊勢参りから帰った大阪の左官屋の喜六、大工の清八が精進落とし目的で遊郭にて遊んだことを題材に騒動あり、夫婦愛あり、友情ありの上方らしい喜劇物語で歌舞伎には珍しく終始笑いの連続でした。



## 「巖島招檜扇」

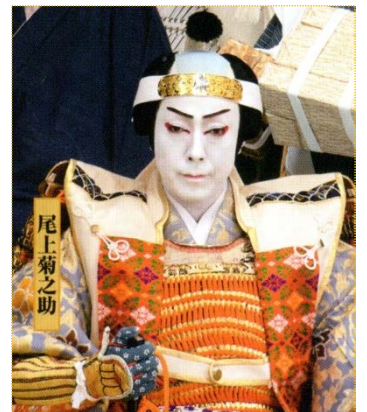
「平家にあらずんば人にあらず」と言われたほど権力をほしいままにしていた平清盛は巖島神社の社殿を新造していた。日が沈みかけ普請が予定の日で完了できなくなった時に、清盛が檜扇で夕日を招き返して普請工事を完了させた。平清盛訳の片岡我當さん(片岡仁左衛門の父)は82歳、2014年の南座にて脳梗塞で倒れられて

からの復帰、不自由な右手を使わず左手で扇を振って、見事な幕切れを演じきられました。



## 「義経千本桜」

渡海屋大物浦の段では、能楽「船弁慶」の筋書きを下敷きに、平知盛役の片岡仁左衛門と義経役の尾上菊之助が好演。菊之助は上品で、仁左衛門は好対照の銀平役、知盛役の二役共にかっこ良かったですね。



立ち回りでは、能楽「田村」の仕舞の部分を取り入れるなど、歌舞伎らしい日本芸術いいところ取りの完成品を観た思いです。はらはらしたのが、安徳帝演じる子役の童、急に眠気に誘われたのか、こっくりこっくり左右に揺れる揺れる、段から落ちやしないのか?と。何とか耐えて拍手。最後の重要なせりふ、「義経の情けを仇に思うな」も完璧にこなし大拍手。最後に仁左衛門が碇綱を身に巻きつけ、大碇と共に海をと身を投げる見事なクライマックスでした。

病み上がりで82歳の片岡我當さん、子役の小学校低学年の都留君、歌舞伎は家族で支え合う芸術で、それぞれが完璧でなくても、頑張ってやれよ!という、役者と観客と一体になって楽しむ芸術という側面を感じました。

(関西運営副委員長 高島 隆三郎・記)